

科学研究費助成事業 研究成果報告書

平成 27 年 9 月 24 日現在

機関番号：15401

研究種目：基盤研究(B) (一般)

研究期間：2012～2014

課題番号：24320006

研究課題名(和文)「和解」概念の展開 - 平和への応用倫理的アプローチ

研究課題名(英文) Evolvement of Reconciliation: an Approach to Peace from the Viewpoint of Applied Ethics

研究代表者

越智 貢 (OCHI, MITSUGU OCHI)

広島大学・文学研究科・教授

研究者番号：00152512

交付決定額(研究期間全体)：(直接経費) 13,700,000円

研究成果の概要(和文)：本研究の目的は、平和実現のための実践的で総合的な理論モデルを提示することである。とりわけ、その特徴は、「平和」の問題を、現実生活の諸相が織りなす「和解」の問題として再構成する点にある。研究期間を通じて、応用倫理学(生命、環境、教育、政治、社会)的アプローチによって上記の課題を追求した。本研究の結果、各応用倫理学領域から出された「和解」概念を総合し、実効的な理論として「展開」させることができた。

研究成果の概要(英文)：The purpose of this research is to show a practical and synthetic model in theory in order to establish a peace. Especially, the distinguishing feature of this research is a point to reconstruct the problem of 'Peace' from a perspective of 'Reconciliation' woven by various phases of actual life. This theme is pursued by multifaceted approaches of applied ethics; bioethics, environmental ethics, educational ethics, political ethics and social ethics- through this research. As a consequence, the concepts of 'Reconciliation' provided by each field of Applied Ethics were integrated and evolved as an effective theory.

研究分野：哲学、哲学・倫理学

キーワード：倫理学原論・各論、「和解」概念の再構築

1. 研究開始当初の背景

本研究の直接の着想は、応用倫理学プロジェクト研究センターによる平成20年度の「平和研究」に端を発する(越智・山内による日本哲学会シンポジウム「平和・戦争・暴力」の企画運営や、同年7月の例会に招待したフランクフルト大学 M. ルッツ=バツハマン教授との「国際公法と暴力」をめぐる討論等)。ここで繰り上げられた「平和」に関する哲学的な課題を、政治哲学の領域からだけではなく、あらゆる応用倫理学領域(生命・環境・教育・政治・社会等)を射程に入れた「和解」の視点から再構成することが、本プロジェクトセンターの新たな研究課題として設定された。それは、大きくは二段構えのアプローチとして構想された。まず、あらゆる次元の「平和」を、各応用倫理学領域から「和解」の視点で「再構成」すること、つぎに、その再構成された各「和解」概念を総合し、実効的な理論として「展開」させること、である。この構想は、すでに「「和解」概念の再構築 - 平和への応用倫理的アプローチ」(科研基盤 B:平成 21-23 年;越智、山内、松井、後藤、衛藤、畠中、岡野、石田、石崎、手代木、眞嶋、濱井、野村)として成果を得ることができた。さらに、この科研期間に協力を得た、加藤、飯島、杉田、高田、裕、村田、黒川を新たな共同研究者に加え、の「和解」概念の総合・展開をめざすのが今回申請する科研課題となる。

2. 研究の目的

本研究の目的は、平和実現のための実践的で総合的な理論モデルを提示することである。具体的には、ひろく実際生活にかかわる「和解」概念に注目する。ねらいは、「平和」(あるいは戦争)の問題を、より現実的な生活のレベルに引き下げて考えることにある。「和解」とは、異質なもの(異質だと感じるもの)が対峙する様態を示す「不和」の対概念である。そうした「不和」と「和解」の関係は、私たちの生活のあらゆる場面でみられ、家族間、友人間、組織間、国家間、さらには自然や神との間においても成立する。このように本研究は、「平和」を、現実生活の諸相が織りなす「和解」の問題として再考する試みといえる。研究の手法は、現実場面を見ずえた生命倫理・環境倫理・教育倫理・政治倫理・社会倫理の各領域からの哲学的および応用倫理的アプローチとなる。そうした考察の結果、各応用倫理学領域から出された「和解」概念を総合し、実効的な理論として「展開」させることを目的とした。加えて、「和解」のプロセス(不和 歩み寄り 互いの赦し: 互惠・共生・共存)を応用倫理的手法で分析・総合することを通して、異質

なものに対する排他性・闘争性とその連鎖という根源的な問題の解明と克服をめざした。

3. 研究の方法

平成24年度は、生命・教育・環境・政治・社会の領域ごとに「和解」概念の精緻化に努めた。理論面においては、内外の関連文献を渉猟する一方で、各領域における国内外の研究者と交流をはかることによって理論の汎用的な可能性を追求した。実践面では、研究の素材となる基礎データを集めるため、各領域がもつフィールドで意識調査等をおこなった。平成25年度は、各領域における「和解」概念の総合をおこなった。具体的には、各領域で抽出された「和解」概念と「平和」構築のパラダイムについて、領域内で総合的な検討を加え、最終的に領域ごとの特色やさらなる統合的な「和解」理念を導出した。最終年度の平成26年は全領域での研究会を通して、領域を包摂する「和解」概念の総合と、それら研究成果の公表をめざした。具体的には、研究結果をふまえ、国内外での学会発表、シンポジウム、公開講座、著作・論文・報告書、ホームページ上の公開、等の形で研究成果を公表していった。とりわけ、シンポジウムでは、国内外の倫理学者、研究者、実践家を招聘し、市民にも開かれた形で研究成果を討議した。

4. 研究成果

平成24-26年度には、「和解概念の展開」という統一課題において、より具体的実践的な課題がとりあげられ、その実効性が問われた。シンポジウムとしては、シカゴ大学(レオ・シュトラウス研究所所長兼)ネイサン・タルコフ教授の講演「Critique and Defense of Liberalism」(リベラリズムの批判と擁護)や、L.ジープ氏による講演「Hegel und die modern Ehtik」(ヘーゲルと現代の倫理学)、さらにはイェナ大学のクリストフ・ハルビツヒ教授の講演「Tugend und Glück - Überlegungen zu ihrem Zusammenhang」(徳と幸福 - その連関についての考察)、イェナ大学のクラウス・フィーヴェーク教授の講演「Hegel über die bürgerliche Gesellschaft als die 'in ihre Extreme verlorene Sittlichkeit' - Der Staat als Versöhnung?」(ヘーゲルにおける両極へ失われた人倫としての市民社会 - 和解としての国家)、ミュンスター大学のミヒャエル・クヴァンテ教授の講演「Das "Scheinen der Vernunftigkeit" und die Grenzen des sozialen Friedens in Hegels Konzeption der bürgerlichen Gesellschaft」(ヘーゲルにおける市民社会構想における「理性性の映現」と

社会的平和の限界)が開催された。また、コロキウム「ドイツ医療倫理学の最前線—人格の生と人間の死—」も行われた。各講演内容と領域毎の個人発表については研究誌・著作等に公表された。政治領域では、Shunzo Majima, *Just Military Occupation? A Case Study of the American Occupation of Japan*, in: Larry May and Elizabeth Edenberg (ed.), *Jus Post Bellum and Transitional Justice* (2013)、石崎嘉彦「合理性と和解性—ヘーゲルの三位一体論解釈と合理性批判の限界—」(『ぶらくしす』第13号)、杉田孝夫「和解は可能か: 政治哲学的問い」(『ぶらくしす』第13号)等が、社会領域では、桐原隆弘「歴史と和解—ドイツ人追放問題を中心に」(『ぶらくしす』第15号)、Haruko K. Okano, *Fukushima und das Prinzip Wa*, in: Publik-Forum, 宗教領域からは、岡野治子「宗教倫理の視点から再考する和解・平和の構築—日本文化の脈絡での試み—」(発表のみ)、宇野正三「空海の思想—調和ある世界を目指して」(発表のみ)、生命領域では、池辺寧「ハイデガーと聴くことの問題」(『ぶらくしす』第14号)、岡野治子「伝統的倫理観と「いのち」の行方」岡野・奥田(編)『希望の倫理—自律とつながりを求めて』、手代木陽「着床前診断と障害者の尊厳—M・クヴァンテの見解の検討」(『ぶらくしす』第13号、2012)等が、環境領域では、Hiroshi Goto, *Die Versöhnung mit der Natur bei E. Husserl—Der Status der Tiere—*, in: *Hiroshima Interdisciplinary Studies in the Humanities* Vol. 10、石田三千雄「自然との和解とは何を意味するのか—自然倫理学の根拠づけの試み」等が、教育領域では、上野哲「フェアプレー教育をめぐる問題点—サッカーにおける「フェアプレー」が含むジレンマに関する考察」(『ぶらくしす』第15号)、後藤雄太「青少年における人間関係—他なる者との和解、そして自己との和解」(『ぶらくしす』第15号)、衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイム—「和解」概念構築の手がかりとして」(『ぶらくしす』第13・14号)、村田貴信「教育の可能性と和解への道」(『ぶらくしす』第16号)等の論文が公開された。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

[雑誌論文](計62件)

- 池辺寧「人間存在と痛み—哲学的考察—」『HABITUS』(査読無し)第18号、2014、pp.85-100.
- 上野哲「小・中学校における技術者倫理教育の実践」『高専教育』(査読有)第37号、2014、pp.447-452
- 上野哲「フェアプレー教育をめぐる問題点—サッカーにおける「フェアプレー」が含むジレンマに関する考察—」『ぶらくしす』(査読有)第15号、2014、pp.45-55
- 桐原隆弘「目的論と技術的合理性—F・G・ユンガー『技術の完成』におけるカント解釈を手がかりとして—」『下関市立大学論集』(査読無)第57巻第3号、2014、pp.69-92
- 桐原隆弘「歴史と和解—ドイツ人追放問題を中心に—」『ぶらくしす』(査読有)第15号、2014、pp.23-44
- 後藤雄太「青少年における人間関係—他なる者との和解、そして自己との和解—」『ぶらくしす』(査読有)第15号、2014、pp.57-66
- 杉田孝夫「カントと日本国憲法をつなぐ—」『日本カント研究』(査読有)第15号、2014、pp.22-38
- 手代木陽「内なる自然との和解—M. サンデルの「被贈与性」の倫理—」『ぶらくしす』(査読有)第15号、2014、pp.67-74
- Shunzo Majima, *A brief thought on the future of global ethics: military robots and new food technologies*, in: *Journal of Global Ethics* (査読無) 10:1, 2014, pp.53-55.
- 村若修「ブレンターノ倫理学における「正しい目的」の概念について—遺稿「若きフランクリンの倫理的謀図」を手がかりとして—」『哲学』(査読有)第66集、2014、pp.45-58
- 衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイム(2)—「和解」概念構築の手がかりとして—」『ぶらくしす』(査読有)第14号、2013、pp.143-166
- 山内廣隆「イェナ—ヘーゲル哲学の揺りかご—」『ヘーゲル哲学研究』(査読有)第19号、2013、pp.99-110
- 山内廣隆「ヘーゲルにおける国家と宗教—」『日本カント研究』(査読有)第14号、2013、pp.23-41
- 秋山博正「「高校生社会貢献活動」の道德教育的意義と課題」『研究紀要』(査読無)第46巻第2号、2013、pp.27-51
- 秋山博正「「人間としての在り方生き方に関する教育」の要点」『研究紀要』(査読無)第46巻第1号、2013、pp.1-22
- 池辺寧「ハイデガーと聴くことの問題—」『ぶらくしす』(査読有)第14号、2013、pp.133-141
- 池辺寧「痛みの意味と医療—」『医療と倫理』(査読有)第9号、2013、pp.3-10
- 香川晴美、鈴木正和、伊藤潔志「保育者の専門性としての発表能力とその育成—」『保育・教職実践演習』を核とした科目間連携に向けて—」『研究紀要』(査読無)第44巻、2013、pp.8-19
- 伊藤潔志「キェルケゴールにおける歴史的教育学的考察—」『新キェルケゴール研究』

- (査読有) 第 11 号、2013、pp.1-15
20. 伊藤潔志「「教職実践演習」の課題と改善に関する一考察」『教師教育研究』(査読有) 第 26 号、2013、pp.49-57
 21. 伊藤潔志『キルケゴールの人間理解と伝達理論に関する研究』、学位(博士)論文、広島大学大学院文学研究科、甲第 6039 号、2013、総ページ数 209 (単著)
 22. 上野哲「小山高専サテライト・キャンパスにおける科学技術倫理カフェ」『高専教育』(査読有) 第 36 号、2013、pp.435-440
 23. 上野哲「「フェアプレー」は教えられるか 日本サッカー協会による「フェアプレー」の解釈に対する批判的考察」『倫理学研究』(査読無) 第 21 号、2013、pp.29-42
 24. 桐原隆弘「歴史哲学における和解概念の起源と展開 ユルゲン・ヒュレン」『人間学の基本構造としての疎外と和解』(1982 年)を手がかりに」『ぶらくしす』(査読有) 第 14 号、2013、pp.1-10
 25. 桐原隆弘「理性による道徳の基礎づけについて カント自律道徳の人間学的意義」『下関市立大学論集』(査読無) 第 57 巻第 2 号、2013、pp.73-94
 26. 後藤雄太「望まない妊娠・中絶をめぐる<生の倫理>」『倫理学研究』(査読無) 第 21 号、2013、pp.43-58
 27. 杉田孝夫「ヴァイツゼッカーと戦後ドイツにおける「和解」の政治哲学(1)」『ぶらくしす』(査読有) 第 14 号、2013、pp.11-21
 28. 眞嶋俊造「反政府テロとしての暗殺は道徳的に許容されるのか?」『応用倫理』(査読有) 第 7 号、2013、pp.1-14
 29. 衛藤吉則「西晋一郎における特殊即普遍のパラダイム(1) - 「和解」概念構築の手がかりとして」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.23-41
 30. Hiroshi Goto, *Die Versöhnung mit der Natur bei E. Husserl – Der Status der Tiere*, in: Hiroshima Interdisciplinary Studies in the Humanities (査読有) Vol. 10, 2012, pp.20-36.
 31. 後藤弘志「マルティン・ゼールにおける怜悯・思慮・道徳的配慮」『哲学』(査読有) 第 64 集、2012 pp.113-126
 32. 後藤弘志「フッサールにおける自然との和解 動物の地位について」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.43-55
 33. 裕智樹「ヘーゲル哲学における時間の問題 「具体的現在」の解釈をめぐって」『哲学』(査読有) 第 64 集、2012、pp.29-41
 34. 山内廣隆「3.11 後を考える」『政治哲学』(査読有) 第 11 号、2012、pp.108-124
 35. 秋山博正、大來尚順、原田和男、松田正典「メリトクラシーとアマタクラシーの倫理的背反と相補」『研究紀要』(査読無) 第 45 巻第 2 号、2012、pp.1-30
 36. 秋山博正「価値認識の補完者としての当為」『研究紀要』(査読無) 第 45 巻第 1 号、2012、pp.1-16
 37. 池辺寧「死を考える - よりよく生きるために - 」『介護福祉研究』(査読有) 第 19 巻第 1 号、2012、pp.57-61
 38. 池辺寧「ハイデガーの根源的倫理学 - 人間の本质としてのエートス - 」『奈良県立医科大学医学部看護学科紀要』(査読無) 第 8 号、2012、pp.23-30
 39. 石崎嘉彦「合理性と和解性 ヘーゲルの三位一体論解釈と合理性批判の限界」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.57-77
 40. 石田三千雄「自然との和解とは何を意味するのか 自然倫理学の根拠づけの試み」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.125-138
 41. 伊藤潔志「キルケゴールにおける実存伝達の教育」『研究紀要』(査読無) 第 43 巻、2012、pp.8-15
 42. 上野哲「哲学者の思考過程を再現的に味わう「哲学」授業の試み」『高専教育』(査読有) 第 35 号、2012、pp.347-352.
 43. 岡野治子「ドイツの神学誌 Publik Forum の問いに回答する-自然災害と原発問題と日本人-」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.115-124
 44. 桐原隆弘「カントにおける「人類」の概念とユダヤ教・キリスト教観」『下関市立大学論集』(査読無) 第 56 巻第 2 号、2012、pp.43-55
 45. 後藤雄太「深淵の倫理 後期ハイデガーとウィトゲンシュタイン」『北海道情報大学紀要』(査読無) 第 24 巻第 1 号、2012、pp.33-45
 46. 杉田孝夫「和解は可能か: 政治哲学的問い」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.79-84
 47. 杉田孝夫「1812 年法論と 1813 年国家論のテキスト問題 フィヒテ法政治論のテキストとコンテクスト」『フィヒテ研究』(査読有) 第 20 号、2012、pp.74-85
 48. 高田純「ヘーゲルにおける宥和の弁証法」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.85-98
 49. 手代木陽「着床前診断と障害者の尊厳 M. クヴァンテの見解の検討」『ぶらくしす』(査読有) 第 13 号、2012、pp.139-146
 50. 手代木陽「クルージュスにおける「蓋然性」の方法」の展開」『神戸高専研究紀要』(査読有) 第 50 号、2012、pp.147-156
 51. Minako Ichikawa Smart, *Shunzo Majima, The Moral Grounds for Reparation for Collateral Damage in Expeditionary Interventions: Beyond the Just War Tradition*, in: International

Journal of Applied Philosophy (査読有)
26:2, 2012, pp.181-195

52. Shunzo Majima, *Just Torture?* in: *Journal of Military Ethics*(査読有)11:2, 2012, pp.136-148.
53. 眞嶋俊造「「保護する責任」概念の変遷における強制的軍事行動のあり方について：試金石としての2011年リビア介入」『社会と倫理』(査読無)第27号、2012、pp.29-39

[学会発表](計24件)

1. 宇野正三「空海思想 - 調和ある世界を目指して」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第18回)2015.2.21、広島大学。
2. 村田貴信「教育の可能性と和解への道」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第18回)2015.2.21、広島大学。
3. 岡野治子「宗教倫理の視点から再考する和解・平和の構築 - 日本文化の脈絡での試み - 」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第18回)2015.2.21、広島大学。
4. 桐原隆弘「戦後和解の倫理学的要件 ドイツ「新東方政策」形成過程における哲学・宗教の役割の再検討」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第17回)2014.9.20、広島大学。
5. 上村崇「哲学教育における和解の可能性」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第17回)2014.9.20、広島大学。
6. 眞嶋俊造「和解・謝罪・赦し：「戦後後の正義」について」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第17回)2014.9.20、広島大学。
7. 杉田孝夫「ヴァイツゼッカーと戦後ドイツにおける「和解」の政治哲学(3)1969年と1989年の間」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第17回)2014.9.20、広島大学。
8. 越智眞「強制労働について 「戦争」と「和解」の意味」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第17回)2014.9.20、広島大学。
9. 野村卓史「ニーチェにおける和解」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第16回)2014.2.21、広島大学。
10. 桐原隆弘「歴史と和解 ドイツ人追放問題を中心に」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第16回)2014.2.21、広島大学。
11. 松井富美男「和解弁証法における「不和」の意義 生命倫理的な観点から」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第16回)2014.2.21、広島大学。
12. 上野哲「フェアプレイ教育をめぐる問題点」広島大学応用倫理学プロジェクトセン

- ター例会(第15回)2013.9.21、広島大学。
13. 後藤雄太「青少年における人間関係 他なる者との和解、そして自己との和解」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第15回)2013.9.21、広島大学。
14. 手代木陽「内なる自然との和解 M. サンドルの「被贈与性」の倫理」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第15回)2013.9.21、広島大学。
15. 加藤尚武「和解の哲学的背景」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第15回)2013.9.21、広島大学。
16. 宇野正三「西田哲学研究 絶対無の場所と個」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第14回)2013.2.23、広島大学。
17. 濱井潤也「沖縄基地問題と「和解」 傷つけられているのは何か？」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第14回)2013.2.23、広島大学。
18. 越智 眞「平和について」広島大学応用倫理学プロジェクトセンター例会(第13回)2012.9.22、広島大学。
19. 山内廣隆「環境と哲学 環境を巡る哲学の旅」日本都市計画学会中国四国支部2012年度特別講演会、広島市まちづくり市民交流プラザ6階マルチメディアスタジオ、2012.7.29(招待講演)

[図書](計16件)

1. 山内廣隆『ヘーゲルから考える私たちの居場所』晃洋書房、2014. 総ページ数156(単著)
2. 小野 紀明、川崎 修、他5名(編) 太田義器、他10名(著)『主権と自由(岩波講座政治哲学第一巻)』岩波書店、2014. pp.75-96(共著)
3. 杉田孝夫「ナショナリズム 国民国家とは何であったのか」小野紀明・川崎修(編集代表)『岩波講座 政治哲学3 近代の変容』岩波書店、2014、pp.125-150(共著)
4. 眞嶋俊造「防衛戦争 人々を守らない戦争」高橋良輔・大庭弘継(編)『国際政治のモラル・アポリア：戦争/平和と揺らぐ倫理』ナカニシヤ出版、2014、pp.130-157(共著)
5. Shunzo Majima, *Whose Rights? Rights Protection in Long-Term Care*, in: Akira Akabayashi (ed.), *The Future of Bioethics: International Dialogues*, Oxford: Oxford University Press, 2014, pp.650-653(共編)
6. Shunzo Majima, *Just Torture? In: Davis Brown and Henrik Syse (ed.), The Just War Tradition: Applying Old Ethics to New Problems*, Abingdon: Routledge, 2014, pp.157-169 (reprinted from *Journal of Military Ethics* 11:2, 2012, pp.136-48)(共編)

- 7.手代木陽『ドイツ啓蒙主義哲学研究—「蓋然性」概念を中心として』ナカニシヤ出版、2013。総ページ数176(単著)
- 8.Valentin Mureşan, Shunzo Majima, *Is Applied Ethics Still an Application of Ethics? A Short History of Applied Ethics in Romania*, in: Mureşan Valenti, Shunzo Majima (ed.), *Applied Ethics: Perspectives from Romania*, Sapporo: Center for Applied Ethics and Philosophy, Hokkaido University, 2013, pp. x-xiv (共著)
- 9.Shunzo Majima, *Just Military Occupation? A Case Study of the American Occupation of Japan*, in: Larry May and Elizabeth Edenberg (ed.), *Jus Post Bellum and Transitional Justice*, Cambridge: Cambridge University Press, 2013, pp.26-43 (共著)
- 10.眞嶋俊造「歴史・戦略・道徳 正戦論の視座からの批判的検討」, 赤木完爾・今野茂充(編)『戦略史としてのアジア冷戦』, 慶応大学出版会、2013、pp.197-222(共著)
- 11.伊勢田 哲治、他3名(編集)、上村崇 他20名『科学技術をよく考える』名古屋大学出版会、2012。pp.258-273(共著)
- 12.「伝統的倫理観と「いのち」の行方」, 岡野治子、奥田暁子(編)『希望の倫理-自律とつながりを求めて』知泉書館、2012、pp.237-267(共著)
- 13.眞嶋俊造「理論と実践の架橋」, 戸田山和久、美濃正、出口康夫(編)『これが応用哲学だ!』, 大隅書店、2012、pp.152-159(共著)

[その他]

ホームページ等、広島大学応用倫理学プロジェクト研究センター

<http://home.hiroshima-u.ac.jp/aepc2005/>

6. 研究組織

(1) 研究代表者

越智 貢 (OCHI MITSUGU)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：00152512

(2) 研究分担者

加藤 尚武 (KATO HISATAKE)

人間総合科学大学・人間科学部・客員教授

研究者番号：10011305

岡野 治子 (OKANO HARUKO)

清泉女子大学・キリスト教文化研究所・研究員

研究者番号：50204003

山内 廣隆 (YAMAUCHI TAKAHIRO)

広島大学・大学院文学研究科・特任教授

研究者番号：20239841

松井 富美男 (MATSUI FUMIO)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：60209484

後藤 弘志 (GOTO HIROSHI)

広島大学・大学院文学研究科・教授

研究者番号：90351931

衛藤 吉則 (ETO YOSHINORI)

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：60270013

裕 智樹 (HAZAMA TOMOKI)

広島大学・大学院文学研究科・准教授

研究者番号：30615480

石崎 嘉彦 (ISHIZAKI YOSHIHIKO)

摂南大学・外国語学部・名誉教授

研究者番号：80232289

(平成24年度～平成25年度)

石田 三千雄 (ISHIDA MICHIO)

徳島大学・大学院ソシオ・アーツ・

アンド・サイエンス研究部・教授

研究者番号：90127605

手代木 陽 (TESHIROGI YO)

神戸市立高専・一般科・教授

研究者番号：80212059

眞嶋 俊造 (MAJIMA SYUNZOU)

北海道大学・文学研究科・准教授

研究者番号：50447059

飯島 昇蔵 (IJIMA SYOUZO)

早稲田大学・政治経済学術院・教授

研究者番号：80130863

太田 義器 (OTA YOSHIKI)

摂南大学・外国語学部・教授

研究者番号：10277858

村田 貴信 (MURATA TAKANOBU)

山口東京理科大学・工学部・准教授

研究者番号：70200293

桐原 隆弘 (KIRIHARA TAKAHIRO)

下関市立大学・経済学部・准教授

研究者番号：70573450

杉田 孝夫 (SUGITA TAKAO)

お茶の水女子大学・生活科学部・教授

研究者番号：40206412

高田 純 (TAKADA MAKOTO)

札幌大学・外国語学部・教授

研究者番号：10111197

濱井 潤也 (HAMAI JUNYA)

広島大学・文学研究科・研究員

研究者番号：10612369

(平成24～25年度)

(3) 連携研究者 無し